あかつきになりたるらしきころほひにペチカを焚きてひとは起きいづ

鎔鑛爐の炎ののぼるいろさへや親しくなりて冷ふかむなり

ふかぶかとフアーコオト著て鼻ひくく清きをとめは銀座をあゆむ

キリストはけふは生れき東京も巴里のごとくに樂の音きこゆ

淺草や吉原かけて寒靄のたなびくころを人むらがりぬ

一とせは短いごとくにて相當に長し一くぎりなる年くれむとす

年の暮よりあたらしき年にうつるまの時のひらめきにも病むこともなし

こがらしも今は絶えたる寒空よりきのふもけふも月のてりくる

ものねたむ心おこりもなくてわが歩みゆく道の泥も氷りぬ

寒月

うつせみのいのちの長きさいはひをまぢかくに見てわれはしぞおもふ

空ひくくまどかなる月いでにけり市中にしてたたずむわれは

この夜ごろ餓ゑて死にする人ありと知るも知らぬも此處につどへる

慈善鍋に銀貨ひとつを入るるさへ善根ゆゑに公にせり

アララギも二十五年を經たりけりアララギをおもへば涙ぐましも

雜歌控

宮本武藏筆賜。渡邊崋山の箱書に、「宮本二天枯木鳴鵙、第一奩、文攷庚辰嘉奈月四日、渡邊登審鑑謹書」

眼のところより嘴にかけて直ざまに生寫せり

とわれはおもふに

この鵡の圖をわれ幾たびか見つれども劍法を
聯想したることなし

日の出創刊號のために三首

とことはに國あたらしく豐榮とのぼる朝日の
光のごとし

あまのはら雲はなびきてくれなゐの八尺の日
こそ見えそめにけれ

ひむがしの日いづる國のいきほひは常稚國と
おもはざらめや

小澤榮一君を悼む（昭和七年三月）

うつしよに君が持ちけむかすかなる光といへどとはに消なめやも

やすらかにここにいまさむ木々の芽の萌えづる春のおくつきどころ

きよき花のひと花ちりてこの朝明ものの行方ぞ悲しかりける

那須にて（九月十一日山樂）

天つ風高く吹きつつ今朝の朝け青國原は晴れにけるかも

矢野氏母堂挽歌

いつしかも時は經ゆきて亡きひとのいましし
ころぞましてしぬばゆ

おのづから冬ふかみつつ一夜さへいよよこほ
しきおもかげにたつ

鈴木金二君に

八王子南町なる君が顏しばらく見ずて我は戀
ひ居り

鈴木金二君の第三男を祝ひて

まづしさも君は言(こと)あげせざるらし君がふみよ
めばいつも樂しも

石泉をはり

後記

○

歌集「石泉」は、私の第九歌集で、昭和六年、昭和七年の作千十三首を收めたものである。昭和六・七年は私の五十歳、五十一歳に當る。

私は昭和五年の十一月に滿洲の旅から歸つて來たが、昭和六年の春から度度感冒發熱して臥床した。そして熱海・那須に轉地してやうやく輕快したが、大澤禪寺で安居會を開いたあたりはいまだ喘息のやうな症狀が殘つてゐた。この年、長兄守谷廣吉が鄉里山形縣で病歿し、佐原窯應上人が近江蓮華寺で遷化せられた。

熱海、那須、箱根、伊香保の歌があり、長兄の葬送に出席した歸りに、鳴子、中尊寺、鹽釜等に遊び、その歌がある。痰喘の症は年末になつて辛うじて癒えた。

昭和七年、伊賀上野に行き長男の病氣を見舞ひ、菊山當年男氏に會つた。夏、舍弟高橋四郎兵衞と共に、北海道の次兄守谷富太郎を訪ひ、志文内から稚内・眞岡・豐原・層雲峽・深川・釧路・阿寒湖・根室・支笏湖・苫小牧・白老・登別等に遊び、歸途十和田湖を見た。

○

ゆふぐれの薄明(うすあかり)にも雪のまの土(つち)くろぐろし冴えかへりつつ

ふりつもる雪のもなかにわれ立つや躑躅(ちまた)のかたは鈍き

ものおと

このゆふべ德川の代にありしとふ戀愛劇を見て涙をおとす

試驗にて苦しむさまをありありと年老いて夢に見るはかなしも

夜もおそく試驗のために心きほひて明治末期を經つつ來りき

風癒えてわれの見てゐる目のまへの土よりひくくかぎろひの立つ

時のまのありのままなる樂しみか疊のうへにわれは

背のびす
むかひ居て朝飯をくふ少年は聲がはりして來れるら
しき
政宗の追腹きりしさむらひに少年らしきものは居ら
じか

○

ながらへてひとりなりけるつひの道かなしき我をい
だきたまはな　救世觀世音菩薩
よひ闇のはかなかりける遠くより雷とどろきて海に
降る雨

かの山をひとりさびしく越えゆかむ願をもちてわれ
老いむとす
ひとりしてわが來つつをる松山に地震はゆりて土う
ごく見ゆ
小さなる自治制布きて昔より役人ひとり居たること
なし
眉しろき老人をりて歩きけりひと世のことを終るが
ごとく
あしびきの山のはざまに自らはあかつき起の痰をさ
びしむ
たまぼこの道のうへよりいつ見ても谿の青きが湧き

たつ如し
心しづかに山をくだりて來しかども曉がたは喘を患
ふる

○

ひとときもためらはざらむ馬虻が疊のうへをひくく
飛ぶ見ゆ
音たてて砂のくづるるやまがはを見おろしにけり歩
みとどめて
つき草ははかなき花とおもへども相模の小野に見れ
ばかなしも

上の山のまちに鍛冶のおとを聞く大鋸をきたふる音
とこそ聞け
たかむらはおぼろになりて秋ぎりの過ぎゆく方に日
は落ちむとす
みほとけに茶呑茶碗ほどの大きさの床ずれありきと
泣き語るかな
いづみよりつづける川に赤き鯉われにおどろく濁り
をあげて
信濃路とおもふかなたに日は入りて雪ふるまへの山
のしづかさ
うつせみのいのち絶えたるわが兄は黒溝臺に生きの

こりけり

昭和六年には右のやうな歌がある。おほむね平凡な歌であつて、句の上などに奇拔な工夫などが無いやうであるが、寫生の比較的眞面目に出來てゐるものも交つてゐるやうである。

○

こゑあげてひとりをさなごの遊ぶ聞けばこの世のものはやあはれなり

やうやくに老いづきにけりさびしさや命にかけてせしものもなし

われを惡む人おもはぬにあらねどもこよひやすらかに臥し居りにけり

まなこ冴えてわれはねむれず巨流河の警戒塹に雪ふるらしも

昭和七年には、かういふ歌などもあり、「警戒塹」などといふ文字が見えるやうになつた。

山なかにくすしいとなみゐる兄はゴムの長靴を幾つも持てり

燕麥のなびきおきふす山畑晴れたりとおもふにはやく曇りける

うつせみのはらから三人ここに會ひて涙のいづるごとき話す

雪ふかきころとしなればこの村の驛遞所より馬も橇
もいづ

笹むらのしげりなだれしこの澤を熊は立ちざまに走
り越ゆとふ

次兄を天鹽志文内に訪うたとき出來たものであつた。ものめづらしいばかりでなく、久しぶりで會つた兄弟三人が、一しよに數日を過ごした感慨がおのづと出たもののやうであつた。

○

この歌集「石泉」につづくのは、歌集「白桃」であるから、はじめて私の歌集は連續することになるわけである。ただ歌集「のぼり路」の後は、戰爭

となつたため、戰爭の歌を棄てることとし、平和の歌を以て編輯し、「小園」につづけるつもりである。

○

本歌集發行にあたり、岩波雄二郎、布川角左衞門、榎本順行、古莊信臣、長島陽子諸氏及び柴生田稔氏の芳情を忝うした。昭和二十六年三月、齋藤茂吉。

納本

昭和二十六年六月十日印刷
昭和二十六年六月十五日　第一刷發行

石泉
定價四百圓

著者　齋藤茂吉

東京都千代田區神田一ツ橋二丁目三番地
發行者　岩波雄二郎

東京都青梅市根ケ布三八五番地
印刷者　山田一雄

發行所　東京都千代田區神田一ツ橋二ノ三　株式會社　岩波書店

落丁本・亂丁本はお取替いたします

製本・刷印堂化大社會式株

齋藤茂吉著

歌集つゆじも	定價	B6判	三三〇頁
歌集遠遊	定價	B6判	二二〇頁
歌集遍歷	定價	B6判	二三〇四頁
歌集小園	定價	B6判	三三八〇頁
歌集白き山	定價	B6判	三三二〇頁
歌集ともしび山	定價	B6判	三四五〇頁
歌集たかはら	定價	B6判	二二〇一〇頁
歌集連山	定價	B6判	二二五八〇二頁

岩波書店刊行